

フルート奏者

高木 綾子_{さん}

高木綾子さんは、精力的にコンサートをごなし、数々のCDをリリースしている人気フルート奏者ですが、同時に、3人のお子さんを育てる母親でもいらっしゃいます。今回は、第3子の誕生から1カ月半という時期に、すやすやと眠る天使の隣で、インタビューをさせていただきました。

(聞き手・構成：伊藤 敬史)



—— どのようなきっかけでフルートを始めたのですか。

母が音大卒でピアノを弾くので、私も2歳くらいからピアノを弾いていました。ただ、手が小さくて、小学3年生の時にオクターブに届くのがぎりぎりだったので、ピアノに見切りをつけました。

1つ下の妹は3歳の時からバイオリンをやっていました。同じ楽器を姉妹でやると対立してしまうので、私は、ピアノでもなく、バイオリンでもなくということで、家にあったフルートを始めました。

—— ご自宅にフルートがあったのですね。

そうです。そのフルートは、母が父とデュエットができたらいいなと思って、昔プレゼントしたものでした。でも、父は結局フルートを吹かずに家の本棚の上の方に置きっぱなしにされていて、「あれはお父さんの大事なものだから、絶対触ってはだめ」と言われていました。それを使っていいと言われて、その瞬間はうれしかった記憶があります。

—— 音楽一家だったんですね。家庭内でアンサンブルをしたりしたのですか。

小さい頃は、母のピアノの生徒さんの発表会や、結婚式などで、よく一緒に演奏していました。

—— 2歳の頃からピアノをやっていて、嫌になってしまう時期はなかったですか。

人前で弾くのは嫌ではないんです。だけど練習するのは嫌（笑）。というのは今でも一緒かもしれないですね。

母がリビングで生徒にピアノを教えていて、その時間に、私は、「練習してなさいよ」と言われて、和室のアップライトのピアノで練習するのですけど、いかに手を抜くかということしか考えませんでした。ピアノを弾いているのに、譜面台に漫画が置いてあったり（笑）。あとは、30分くらい弾いてカセットテープに録音したのを流して、裏口から逃げて遊びに行ってしまうとか（笑）。

—— 初めてフルートを吹いたときの印象はいかがでしたか。

ピアノと比べると、ト音記号しかないし、ピアノの楽譜なら縦に5、6個音符が並んでいるところが、フルートは単音で横に音符が並んでいるだけなので、何て簡単な楽器なんだろうと思いました。

—— フルートの魅力は、どういうところにあると思いますか。

実は、フルートは嫌いなんですよ（笑）。

—— えっ、そうなんですか。

フルートって、柔らかいとか、優しいとか、きらびやかとか、きれいなお姉さんが吹いているみたいなイメージがあり過ぎて、あまり人間っぽくない感じにとらえられやすいですね。実際は、声楽と同じような感じだと私は思っていて、もっと生々しさがあるにもかかわらず、そういうイメージでしか取られないから、あまり好きではありません。

ですけど、高校1年生の時に今使っている楽器と出会って、その楽器を使うことによって、フルートらしくない音が出て、自分のやりたい表現ができるようになって、フルートが好きになったというところはありますね。

—— 「フルートらしくない音」というのは、どんな音ですか。

高音できれいな、鳥の鳴き声のようなものではなくて、低音がガシッとした音です。私はコンクールや演奏会で評価されるとき、「低音で男らしい音をしている」と言われます（笑）。そういう音が出せるところが、今使っているフルートの魅力です。

—— どういう楽器を選ぶかによって、演奏家としても変わってくるのですね。

結構変わります。私は、うまくいった方だと思います

ですけど、コンクールに出ると、今の楽器のデメリットもあるので、そのデメリットの部分をどれくらい減らしていくかというのも考えましたね。

—— 音楽家になろうと思ったのはいつ頃ですか。

小さい頃から音楽をやっていて、母もピアノを弾き、妹もバイオリンをやっていたので、きっと私を音楽家にしたいんだ、という思い込みは小さい頃からありました。

その後、父の転勤でベルギーに住んでいて、その赴任期間中に高校受験が迫りました。それで、現地のインターナショナルスクールに入るか、ベルギーやパリのコンセルバトワール（音楽院）に入るか、日本に帰って芸高（東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校）に行くか、どれにすると言われました。私は、音楽の基礎的な楽典とかをあまり勉強してなかったもので、日本語でそれを勉強してから留学しても遅くないと思い、芸高を受けて、受かりました。そこから将来のことを考え始めたのかなと思いますね。

—— ヨーロッパで音楽の勉強をするのと日本でやるのと、何か違いがあるものですか。

一番大切なのは語学だと思うんですよ。フランスの作曲家はフランス語をしゃべるような音楽を作るし、ドイツの作曲家はドイツ語をしゃべるような作曲をします。今私たちが演奏している曲はヨーロッパの曲が多いので、それを知るためには語学が大切だなと、今にして思います。

それと生活習慣などは、その地域に住んで感じるところはあります。

ただ、最近は、留学をしないでも、そういうことを感じ取ることができるようになってきていると思います。私は、自分の先生が長年ドイツで演奏されていた方でしたし、ミュンヘンの音楽大学の教授をされていた方が私の在学中に芸大（東京芸術大学）で教えてくださっていたので、よかったと思います。

——数々のコンクールでの受賞歴がありますけれども、コンクールというのはどういう位置づけなのですか。

音楽業界では、タイトルがないと上に上がりにくいというところがないにしもあらずです。もちろん、コンクールで賞を取っていなくても上り詰めていく人はいますが、やはりコンクールで1位になるのが手っ取り早いですね。

ただ、私は、CDデビューが決まったのが、学生音楽コンクール以外のコンクールで1位をとる前でした。

——どのような経緯でCDデビューしたのですか。

あるピアニストが豊田市のホールで録音をしていた時に、ディレクターさんが、そのホールで私の演奏会のチラシを見て、「フルートの子を探しているんだけど、この子どう？」とホールの人に聞いたら、ホールの人が薦めてくれたんですって。それで、CDを出さないかという話が来ました。

私は、当時まだ大学3年生で、見掛けでデビューする道には走りたいと思いつつも、やっぱりチャンスは逃したくないというのもあって、先生に相談しました。その時、そういう話を1回断ると、それが業界に全部流れてしまうので、学生生活に支障がない程度にやりなさいと言っていました。

CDを発売したのは大学院1年生の時だったのですけど、コンクールで一度も優勝したことがないのにCDを出すと、「なんでデビューできたの」と後ろから突かれるんですよ。

それで、普通はデビューをしたらコンクールなんて受けなくてもいいのですが、その陰口が嫌だったので、その後にダダダッとコンクールに出て1位をとりました。

——そういう同業者同士のライバル関係はあるものなのですか。

フルートのソリストは、バイオリンやピアノと違って、あまり需要がないから、供給する側も数名に限られてきます。その位置を取られると、棒が減りますから、叩かれましたね。

デビューの仕方も、クラシックの小品集の他にユーミン（松任谷由実）の曲を入れたので、「芸大生なのにポップスに走ったよ」と言われたりしました。

でも、好きでもない曲を吹くのは嫌ですが、ユーミンやカーペンターズは自分も好きで聴いていたので、構わないと思いました。そもそもクラシックをやっているからポップスを聴かないという世代ではありませんからね。

——録音する曲は、ご自身で選ぶのですか。

ディレクターさんと相談しながら決めます。当時、宇多田ヒカルさんなどのR&Bがはやっていたのですが、R&Bだと、リズム系の曲なので、フルートでメロディだけにすると面白くないのですよね。それでメロディックで、フルートで吹いても違和感がない曲にしました。

——クラシックを吹くときと、ポップス系の曲を吹くときでは、何か違ったりしますか。

抜き方というのかな。何か発音が違うんですね。オペラを歌うのとポップスを歌うのが違うような感じだと思います。

——高木さんは、海外でもたくさんコンサートをされていますが、日本と海外で聴衆の違いは感じますか。

聴きに來る人たちの姿勢が、若干違うと思いますね。

ヨーロッパだと、社交の場に行くみたいな感じがあります。正装していくのが当たり前みたいな。日本で歌舞伎をいい席で見の方がお着物をちゃんと着てという感じに似ているかもしれません。ヨーロッパのコンサートでも学生席があって、そこは歌舞伎

実は、フルートは嫌いなんです（笑）。もっと生々しさがあるにもかかわらず、きれいなお姉さんが吹いているみたいなイメージがあり過ぎて。でも、高校1年生の時に今使っている楽器と出会い、フルートらしくない音が出て、自分のやりたい表現ができるようになってから、好きになったところがありますね。

高木 綾子



の立ち見席みたいな感じが。

日本のクラシックの演奏会だと、社交として来る人はあまりなくて、その演奏者が好きで来るという割合が多いのではないかと思います。日本の方が、ちょっとミーハーな部分が見えなくはないかな。

——なるほど。

ヨーロッパの演奏会では、飴をガサガサと出して食べている人はいないですね（笑）。

——そういうのは、ステージからでも気になるものですか。

気になる場所でやっていると気になりますね。

——客席って、どのぐらい見えているものですか。

ホールにもよりますね。ステージに強くライティングされていると、客席が全然見えないときもあります。まあ、演奏家はあまりライティングが強いのを嫌うので、意外と見えています。客席で夫を探せます（笑）。

——ご主人はトロンボーン奏者ですが、一番身近なパートナーがお仕事に理解があるというのはいいですね。

演奏活動に関しては、本当に受け入れてくれるというか、サポートをしてくれます。練習時間がなかなか確保できないんですけど、切羽詰まると、「ごめん、1時間だけ練習させて」とか言って、子どもたちの面倒をみてもらいます。

時々、向こうからたしなめられることもあります。「練習をしなくて大丈夫？」、「すみません、します」みたいな（笑）。

——その世界をわかっているだけに（笑）。

わかっているだけに、きつい一言が来ることも多々あります。今日は結構いい出来だったと思っても、「あそこを間違えるのはどうかな」と言われたり。

逆に、こっちが、いまいちだったかなと思っても、「すごいよかったよ」と言われて、「あ、そう？ そう聴こえたんだったらいいや」みたいに気持ちが軽くなることもあります。

——それはいいですね。3人のお子さんがいらっしゃいますが、お子さんができて、音楽の表現が変わりましたか。

譜面上に「ここは愛らしく」と書いてあると、子どもを抱っこしているイメージを持ったり、愛情表現で、イメージを膨らませる部分で子どものことを考えることは増えたと思います。

——お子さんを妊娠されている時でも演奏をなさっていましたね。よく音楽は胎教にいいと聞きますが…。

それ、絶対に音楽家にとってはよくないと思います。

——そうですね。

音楽を聴く分にはいいと思うんですよ。

でも、こっちは演奏する身でしょう。自分が好きな曲を好きな時間に好きなだけ吹くなら胎教にいいと思うのですが、そうではないじゃないですか。自分が全然練習をできていなかったとすると、いろいろするでしょう。練習ができて、その練習がはかどらなかったり、苦手な曲だったりすると、またいろいろするでしょう。舞台に立つときはストレスやプレッシャーがあるでしょう。しかも学生を教える身にもなっていると、生徒を叱りながら教えるわけでしょう。そういうことを考えると、絶対に胎教によくないと思うな（笑）。

——そうですね（笑）。妊娠何カ月ぐらいまでステージに立っていらっしゃったのですか。

2人目のときは産まれる2週間前まで。

——えーっ。

結果、予定より早い9月20日に産まれたのですが、9月4日まで広島でコンサートをやっていました。飛行機に乗る時、出産予定日をぼやかしていましたね。28日前から医師の承諾書か何かがいるのですが、ぎりぎりだったので、「10月上旬だと思います」とか言って（笑）。

——出産後も、すぐにコンサートに出られていますよね。

ありがたいことに、私は出産後にトラブルがないので。コンサートは1カ月経ってから復帰しましたが、審査員の仕事は産後10日ぐらいからやっていました。

——育児と仕事の両立は大変ではないですか。

夫様々と、保育園様々と、妹様々と、ベビーシッター様々のおかげです。周りの協力なしでは無理です。

——大学でも教えていらっしゃいますが、教えることで得たことはありますか。

自分が教える立場になって、自分の演奏を客観的に解釈するようになったのはよかったです。自分が感覚でやっていることを全部言葉で説明しなければ生徒にわからないから、私はどういうふうに吹いているんだろうと考え始めて客観視することができました。

——今後の夢はありますか。

機会があったら留学したいですね。夫がロンドンに留学をしていたから、ロンドンに行きたいと言うかもしれないけど、ロンドンは物価が高いから却下（笑）。それだったらイタリアかな。イタリアはオペラになってしまうから、あまりフルートを学ぶ環境にはならないかもしれませんが。子どもを連れていったら楽しいだろうなと。

プロフィール たかぎ・あやこ

東京藝術大学大学院修了。第70回日本音楽コンクールフルート部門第1位、ジャン＝ピエール・ランパル国際フルートコンクール第3位、神戸国際フルートコンクール第3位など多数の受賞歴を誇る。2004年秋にはパリ室内管弦楽団との共演でパリ・デビュー。2000年にCDデビューを果たし、これまでに12枚をリリース。すべてが高い評価とセールス実績を残す。また、テレビ・ラジオ・CM出演など従来のクラシック演奏家の枠にとらわれない活動で各方面から注目を集めている。現在、東京藝術大学准教授、洗足学園音楽大学客員教授を務めるなど後進の指導も行っている。